

## 光源氏の寂寥

——周辺女性達との出家をめぐる対話の意味するもの——

姥澤 隆 司

### 一 はじめに

若菜下巻において、朧月夜尚侍と朝顔宮との出家の事実が明かされる。朝顔宮については過去の時点で出家していたものとして、朧月夜尚侍については現在の時点で光源氏の耳に入った情報としてである。更にこの後、柏木巻において女三宮が父朱雀院の導きによって出家することとなる。また、鈴虫巻においては、秋好中宮が出家の意思を光源氏に打ち明ける場面も描かれる。もとより、紫上も早くから出家の意思を光源氏に対して示していた。

つまり、若菜下巻以降、光源氏の周りで長く深い関係のあった女性達が次々に出家したり出家の意思を示したりすることになるのである。この物語進行は、光源氏にどのような意味を持たせ、どのような影響を与える意図のもとに仕組まれたものなのであろうか。また、そこから光源氏のどのような人間像が浮かび上がって来るのであろうか。光源氏の最愛の伴侶である紫上については、光源氏との夫妻としての重みから他の女性達とは別格に取り扱う必要があるものと考え、本稿では光源氏の周囲を取り巻く他の女性達を対象として、その課題を追究してみるものとする。

### 二 朧月夜尚侍の場合

朧月夜出家の報が光源氏に届くのは、光源氏が柏木と密通を犯した女三宮の扱いに苦慮して、女三宮とは逆に行き届いた対処が出来た玉鬘を回想したことに触発されて遠い過去から呼び出されたかのような状況下でのことだった。

朧月夜が物語に登場するのは、若菜上巻で光源氏との密会が語られて以来のことである。そうであったからこそ、「二条の内侍のかむの君をば、猶絶えず思ひ出できこえ給へど」に続いて、「かの御心よわさもすこしかるく思ひなされ給けり。」（若菜下三〇頁）<sup>1</sup>と女三宮密通事件を引き合いに出して光源氏が朧月夜との間に心理的距離を感じるようになっていたという、敢えてその空白の時を合理化する作業が必要とされたわけである。

それでも、朧月夜が遂に出家したと聞いては、「いとあはれにくちをしく御心動きて、まづとぶらひきこえ給。」（同右）のである。「今後朧月夜との再会は期しがたいと思うと、源氏は日ごろの自制がきかなくなる。」<sup>2</sup>という解説は的を射たものと言える。

かくして、光源氏は朧月夜に見舞いの手紙を送り、和歌の贈答となる。

(光源氏) あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩たれしもたれならなくに

さま／＼なる世の定めなさを心に思ひつめて、いままでおくれきこえぬるくちをしさを。おぼし捨てつとも、避りがたき御回向の中には、まづこそはと、あはれになむ。 若菜下三〇一頁

(朧月夜) 常なき世とは、身ひとつにのみ知り侍にしを、おくれぬとのたまはせたるになむ、げに、

あま舟にいかゞは思ひおくれけん明石の浦にいさりせし君 回向には、普き門にても、いかゞは。 若菜下三二頁

光源氏の贈歌下句は、朧月夜に言い掛かりをつけるような詠みぶりである。しかし、実際、光源氏が須磨謫居を余儀なくされた直接の原因が朧月夜との関係によつて弘徽殿太后の不興を買ったことにあるのだから、事実を離れた言い掛かりとは言えない。贈歌に続く文でも、「避りがたき御回向の中には、まづこそは」というのも、光源氏と朧月夜との長い(事実上の夫である朱雀院とよりも長い)関係を顧みれば、光源氏としてそのような期待を口にしても不思議はないと言えよう。また、長く愛人関係にあつた(長い間愛して来た)女性との永の別れに際して掛ける言葉として、親密な関係に基づく信頼感を前提にした物言いは、相手の心を動かし感慨を催させるものであつても、決して不快感を感じさせるものではない。

それに対して、朧月夜の返歌はいささか手厳しいと言えよう。「常なき世とは、身ひとつにのみ知り侍にしを」とは、光源氏の「さま／＼なる世の定めなさを心に思ひつめて」に対応した物言いで、光源氏との愛情関係で無常を感じる辛い気持になつたのは自分だけで、光源氏は辛い思いなどしなかつただろう、という意味に解釈できる。光源氏とともに過去の関係

を懐かしむつもりはない、という意思表示かとも受け取られるような言いぶりである。そして、その返歌は「明石の浦にいさりせし君」という下句の解釈が問題となる。『細流抄』は「明石上ゆへにあかしまてはくたり給へる也我身ゆへにてはなかりしと也」と注したのだが、『玉の小櫛』が「明石の浦といふに、明石上の意は、さらになし、たゞ須磨の浦といはむも、同じこと也」と反論したのである。現代の注釈では、『新全集』だけが「源氏のいう「須磨」を「明石」に変えて、流離の真相は明石の君との邂逅にあつたと切り返す。」と『細流抄』の解釈を踏襲している。ここは、『玉の小櫛』が述べるように、贈歌の「須磨の浦に藻塩たれし」に依じて「須磨の浦」を「明石の浦」に、「藻塩たれし」を「いさりせし」に換えたものである。しかも、句の形をそっくり取っており、返歌としては付き過ぎと評してもよいほどだ。『新全集』も、先ほどの注に続けて、「歌意はともあれ、流離の過往に遡る発想の点で、源氏に心を合わせる気持があるう」と述べている。また、朧月夜は光源氏の妻ではないのだから、光源氏がほかに愛人を作ることを責め得る立場にないことも明らかであろう。『細流抄』の解釈は深読み過ぎたものと言わざるを得ない。

返歌に続く「回向には、普き門にても、いかゞは」という文は、光源氏の「避りがたき御回向の中には、まづこそは」に対する切り返しである。「軽くないなした文面」と評されているが、結局のところ、光源氏に対する回向は一切衆生のための回向の中で行う、という意味になるわけで、光源氏の望みを拒絶するものではない。つまり、朧月夜の返書は、男からの消息に対して定式の切り返しを伴いながらその意図に反しない範囲で返答したものと、と言えるのである。

その点については、この返書を書く以前に光源氏からの文を読んだ時点

で、予測のつく語られ方がなされていた。

とくおぼし立ちにしことなれど、この御さまたげにかゝづらひて、人にはしかあらはし給はぬことなれど、心の内あはれに、むかしよりつき御契をさすがに浅くしもおぼし知られぬ、など方々におぼし出でらる。

若菜下三頁

光源氏が朧月夜の出家を妨げたというのは事の経緯としてはその通りであると言える。若菜上巻で朱雀院が山寺に移った時に、朧月夜は「尼になりなんとおぼしたれど、かゝるきほひには、慕ふやうに心あはたし、と諫め給て、やうく仏の御ことなどいそがせ給」(若菜上四九頁)というところで、いずれ近いうちに出家する意思を持っていた。ところが、間を置かずに光源氏が忍んで来て愛人関係が再燃するという仕儀に至るのである。ただ、その後、紫上の辛い気持を察した光源氏が何もかも打明けたことで、朧月夜との再燃した関係は一時の出来事で終わるわけである。これを最近まで続いていたかのように考えるのは、繰り返し語られる光源氏の紫上に対する愛情をあまりに軽視した解釈と言わざるを得ない。また、引き続き紫上にその返書を見せる場面での「いまはむげに絶えぬる事にて」という記述とも矛盾することになる。なお、若菜下巻での朧月夜再登場の記述の意味については本章冒頭で述べた通りである。光源氏の文を読んだ朧月夜は、二人の関係の長さ深さに思いを致し、「浅くしもおぼし知られぬ」のである。更に、「心とゞめて書き給」ことになる。光源氏へ返書を認める前段階でこれだけ光源氏との過去を懐かしいものとする感情に満たされていれば、返書で光源氏の気持を傷つけるような事柄を記すことは何としても考えられない。

一方、光源氏の側に朧月夜に対して懐かしさ以外の感情を持つ理由は認

められない。それが贈歌に続く「いままでおくれきこえぬるくちをしさを」という独白とも取れる物言いになっているのである。もちろん、出家に踏み切った朧月夜を賞賛する意図が含まれていることであるが、それ以上に近年の光源氏自身の心境を打明けて差し支えない相手として朧月夜を認めているものと考えてよい。それらの感情を集約した言葉が末尾の「あはれになむ」の一語であろう。現在に至るまでの朧月夜との長く深い間柄を思い返せば、たとえ出家して現世の縁は切れたとしても、回向という形で光源氏のことを忘れないでいてくれるに違いない、という光源氏の思いは、単なる男の甘え、と断じてしまうには忍びない重さを物語展開の中で獲得していると言えるのではないだろうか。

そして、光源氏は朧月夜の返書を紫上に見せる。

いといたくこそはづかしめられたれ。げに心づきなしや。さまざま心ぼそき世中のありさまを、よく見過くしつるやうなるよ。なべての世のことにも、はかなく物を言ひかはし、時々によせて、あはれをも知り、ゆゑをも過ぐさず、よそながらのむつびかはしつべき人は、齋院とこの君とこそは残りありつるを、かくみな背きはてて、齋院、はたいみじう勤めて、紛れなくおこなひにしみ給にたなり。

若菜下三九頁

朧月夜に手痛くあしらわれた、とまずは述べ、朧月夜の指摘を肯定した上で自身の道心の温さを反省する。これは表現こそ強いものの、実際には紫上に対する照れ隠しと見てよいだろう。光源氏が出家の本意を抱いているということは既に紫上の前で言明していることであり、いわば見えを切った手前、朧月夜に先を越された上に軽くないなされたというのは、いかにも体裁が悪い。紫上の前では苦笑せざるを得ないわけである。続いて、

朝顔宮が既に出家していたことが話題に上る。光源氏が述べる通り、朝顔宮は遙か昔から、「よそながらのむつびかはしつべき人」即ち風流の友と言える間柄であった。従つて、その出家に当たつて事前に光源氏に連絡がないのは当然のことであるが、隴月夜と朝顔宮と、この二人が光源氏に事前に連絡のないままに自力で出家を果たした、という事実で共通するところがあることになる。この後、話題は女子教育の困難さに移るが、これは隴月夜との贈答の前に、光源氏が女三宮の不始末を考えていたこととの繋がりによるものであり、その後、光源氏が紫上に隴月夜の尼衣の用意を依頼して、隴月夜の出家をめぐる話題は終結する。

若菜下巻の隴月夜出家の報による光源氏と隴月夜との最後の手紙の贈答で、二人の遣り取りは長い物語の展開の中で互いの信頼関係の中で築き合つて来た絆の深さを改めて示すものであった。隴月夜は、光源氏の中に懐かしい女性としての面影を保持したまま、物語の世界から姿を消し去るのである。

### 三 秋好中宮の場合

光源氏が秋好中宮のもとを訪れたのは、冷泉院からの勧誘に応じて御所を訪ね詩歌の遊びに興じたついでに挨拶に向いたということだった。まず、准太上天皇という地位の窮屈さに心ならずも無沙汰を重ねている詫びを言上する。秋好中宮の身分を考えた謙遜の気遣いの十分な挨拶である。その後、自分より年下の者達が次々と逝去したり出家したりで自分のもとから去つて行く寂しさに自身も出家の志が深まるので、そうなった場合の係累への援助を依頼する言葉が続く。光源氏の養女であり、実子である上

皇の中宮という身分から、光源氏が頼りにするのは自然なことと言える。それに対して、秋好中宮も冷泉院が讓位してから里下がり難しくなり光源氏に会えない実情を述べるのだが、その中で自らも出家の志があることを伝えるのである。

(光源氏) われより後の人くくの方がたにつけておくれゆく心ちしはべるも、いと常なき世の心ぼそさのどめがたうおぼえ侍れば、世離れたる住まひにもやとやうく思ひ立ちぬるを 鈴虫八〇頁

(秋好中宮) みな人の背きゆく世をいとはしう思ひなることも侍りながら、その心のうちを聞こえさせうけたまはらねば、何事もまづ頼もしき陰には聞こえさせならひて、いぶせく侍 鈴虫八〇頁

二人が出家の志を述べ合う部分だが、他の人々が出家して行くので自分も出家したい気持が強まった、という理由が全く同一である。その前、なかなか会う機会が得られなくなった、という部分も含めて、秋好中宮の応答が光源氏の発話をなぞった形になっていることがわかる。また、「何事もまづ頼もしき陰には聞こえさせならひて」という発言は、この応答の前に「例の、いと若うおほどかなる御けはひにて」と語られているように、秋好中宮が養父光源氏に大きな信頼を寄せ、その教導に従う人物として造型されていることを明らかにしているのである。

秋好中宮が出家の志をほめかしたことに對して、当然のことながら、光源氏は浅慮であると諫める。秋好中宮は「深うも汲みはかりたまはぬなめりかし」と光源氏の態度を不満に思うが、先の発言内容程度では秋好中宮の真意が光源氏に伝わらないのは止むを得ないことと言わざるを得ない。そこで、秋好中宮は母六条御息所を地獄の業苦から救いたいとの本意を述べることになるのだが、その言葉の前に秋好中宮の心中を明かす語り

手の説明が非常に丁寧に加えられている。これは、秋好中宮の母六条御息所を救いたいと思う気持ちが真摯なものであることを証明するために、その拠つて来るところ、即ち母が地獄に堕ちていることの具体的情報を知っていることを読者に明かすための記述と考えられる。秋好中宮の言葉に続いて「かすめつゝ、ぞの給ふ」と記されているが、「かすめ」た理由は「あらわに言えば、反駁じみ、また賢女ぶつて聞えるので、それとなくにおわせる。」<sup>8)</sup>という解説の通りで、先の「例の、いと若うおほどかなる御けはひにて」という秋好中宮像と軌を一にするものである。また、そのためにこそ、先の語り手の説明が必要とされたのである。決して「かすめ」たことによつて光源氏の理解を不十分にさせるものではない。

亡き人の御有様の罪かろからぬさまにほの聞くことの侍しを、さるしるしあらはならでもおしはかり伝へつべきことに侍りけれど、

鈴虫八三頁

「ほの聞くこと」と婉曲な表現ではあるものの、「さるしるしあらはならでも」と「さるしるし」という言葉をわざわざ使ったことが逆に六条御息所が死霊となつて出現したことを秋好中宮が知つてゐるという事実を推量させるに十分なものになつてゐる。以下、秋好中宮の母六条御息所を地獄の業苦から救いたいという思いは痛切なものとして表現されている。これに対して、光源氏は「げにさも思しぬべきこと」と秋好中宮の心情を理解し満腔の同情とともに受け止めるのであるが、出家の望みについては強く押し止めるのである。

光源氏の論理は次のようなものだ。秋好中宮が出家して母六条御息所を救いたいと思つても、聖の身であつた目連のようにはいかないだらうから、中宮の地位を棄てたことが無駄になつてこの世に執着を残すことになつて

は、出家した意味がなくなる。それよりは、母六条御息所の業苦が軽くなるように手厚い供養をするべきだ。実は、光源氏は朝顔巻で亡き藤壺中宮が夢に現れて怨み言を述べた時に、深く心を揺さぶられて、悲しみのあまり、「何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、とぶらひきこえにまうでて、罪にも代はりきこえばや」(朝顔三三頁)と考えたことがある。これは現在の秋好中宮の母六条御息所への思いと似てゐるようであるが、秋好中宮の場合は「みづからだに、かの炎をもさまし侍りにしかな」という実現の可能性があるのに対して、光源氏の場合は、自分が藤壺中宮の罪を代わつて引き受けたいという、実現不可能な点で大きく異なるのである。もちろん、実現不可能なことを痛切に願わなければならぬ光源氏の悲しみの深さこそが量り知れない重みを持つことは言うを俟たないのである。従つて、秋好中宮には出家せずとも母六条御息所を供養する道が開かれてゐることになる。光源氏の秋好中宮の出家に対する反対意見は筋の通つたものであると言えよう。

光源氏が秋好中宮の出家を押し止めることについては、光源氏の秋好中宮への執着心を指摘する論もある。確かに、秋好中宮が「源氏につながるだいな絆の一つ」<sup>9)</sup>であることは言うまでもない。既に述べたように、秋好中宮の居所に来て光源氏が最初に挨拶した言葉の中にも、自分が出家した後の係累への援助を請う内容が入つてゐた。だが、それ故に光源氏が秋好中宮の出家を無理に阻止すると理解するのであれば、これも先に述べたように、物語本文にも明記されている秋好中宮の光源氏に対する大いなる信頼感を見る限り、賛同し難い見解と言わざるを得ない。

母六条御息所の供養を勧めた後、光源氏は自身の有様を次のように述べる。

しか思ひたまふること侍りながら、ものさはがしきやうに、静かなる本意もなきやうなる有様に明け暮らし侍りつゝ、みづからの勤めに添へて、いま静かにと思ひ給ふるも、げにこそ心をさなきことなれ

鈴虫六三頁

出家の志は持ちながら日常の些事に紛れて果たさないままで、いざれ出家の志を果たした後に日々の勤行とともに六条御息所の供養をしたい、と考えているのは、秋好中宮が述べたように思慮に欠けたことである。この光源氏の言葉に嘘はない。出家の念願を果たせない自身の有様を情けないことと自省することは、先に取り上げた朧月夜出家の場面で紫上に対して述べていた感慨と同一である。更に、「げに」と秋好中宮の「物のあなただけに思ふ給へやらざりけるがものはかなさを」という後悔の言葉を受けて、それが秋好中宮だけの失態ではなく光源氏も同様なのだとして、秋好中宮の母六条御息所を追慕する気持ちに寄り添う優しさを示すのである。秋好中宮の真情を十分に理解し、光源氏自身の日頃の思いとも重ね合わせた上で、秋好中宮への助言が発せられたのであるという事情をこの上なく明瞭に述べた言葉と言つてよい。だからこそ、引き続き語り手の次のような言葉が述べられるのである。

世中なべてはかなくいとひ捨てまほしきことを聞こえかはし給へど、  
なほやつしにくき御身の有様どもなり。

鈴虫六三頁

指摘するまでもないことだが、この語り手の言葉の眼目は「聞こえかはし給へど」「御身の有様どもなり」にある。光源氏と秋好中宮との対話がいかに同一の背景をもとにして同一の話題について行われていたものであるか、ということ明らかにしている。もちろん、六条御息所の死霊出現の意味づけは、六条御息所との関係性の相違によって両者で違いはあるも

の、その存在を通して道心の在り方を考えざるを得ないという点で同一の課題を背負わされているのである。それと同時に、「御身の有様ども」には両者の身分の高さが出家遂行の妨げになつていふ事情も語られている。直後の本文にこうある。

よべはうち忍びてかやすかりし御ありき、けさはあらはれたまひて、  
上達部どもまゐり給へるかぎりはみな御おくりを仕うまつり給ふ。

鈴虫六三頁

前夜、冷泉院の誘いで参上した時は、十五夜の管弦の遊びに六条院に集まつていた蛭兵部卿宮を始めとする人々と一緒だったとは言え、あくまで私的な参上であつたものが、一夜明けてその事実が広まれば私的行動では済まされないのが、准太上天皇という光源氏の身分である。先に光源氏が述べた「ものさはがしきやうに、静かなる本意もなきやうなる有様に明け暮らし侍りつゝ」という言葉は事実と反したものではなかつたのである。

中宮ぞ、中くまかで給ふこともいとかたうなりて、たゞ人の中のやうに並びおはしますに、いまめかしう、なかくむかしよりもはなやかに御遊びをもし給ふ。何事も御心やれる有様ながら、たゞかの御息所の御ことをおぼしやりつゝ、おこなひの御心すゝみにたるを、人のゆるしきこえ給まじきことなれば、功德のことをたてておぼしいとなみ、いとゞ心ふかう世中をおぼし取れるさまになりたまふ。

鈴虫六三頁

秋好中宮が冷泉院の讓位によりかえって以前よりも自由な行動が取りづらい境遇に置かれている、という事実が、先にも秋好中宮自身の口から述べられ、更にこの場面でも語られるのは、秋好中宮の出家の志がいかに実現し難い事柄であるかを強調したいからに他ならない。引用本文の後半部

は、秋好中宮が光源氏の教導に従って母六条御息所の追善供養に心を入れることで、深い洞察への道を歩み始めたことが記されている。これは、まさに光源氏が望んだことであると同時に、秋好中宮に許される母六条御息所を地獄の業苦から救済する娘としての唯一の方策でもあったことが明確に示されているのである。なお、「世中」とはもちろん男女の仲を指しているが、秋好中宮に特別に夫婦間・男女間で問題があるわけではない。母六条御息所が地獄に堕ちて苦しんでいるのが、光源氏との男女関係に発する瞋恚の心によるものであることから、男女関係の難しさを深く理解した、というに過ぎない。もともと、その理解こそが男女関係の中でしか自分の生き方を見つけられない貴族社会に生きる女性の重大事であり、その理解を深めることが女性としての成長を物語ることになるのである。

振り返って見れば、光源氏と秋好中宮との対話は、光源氏の述べた挨拶の内容をなぞる形で秋好中宮が応答し、その中で述べられた秋好中宮の出家の願望に対して、光源氏がその本来の意図を損なわずに実現可能な方法を教示したものであった。秋好中宮はその教示を守り、自身で出来る限りの孝行を母六条御息所に尽くそうとするのである。改めて、光源氏と秋好中宮との間に共通の背景に拠った理解の存在を認める所以である。

#### 四 女三宮の場合

紫上を喪って半年が過ぎる翌三月、紫上追慕の想いに過ぐす光源氏は「つれづれ」のままに女三宮を訪ねる。

何ばかり深くおぼしとれる御道心にもあらざりしかども、この世に恨めしく御心乱るゝ事もおはせず、のどやかなるまゝに紛れなくおこな

ひたまひて、一方に思ひ離れ給へるもいとうらやましく、かくあさへ給へる女の御心ざしにだにおくれぬること、とくちをしうおぼさる。

幻二五頁

光源氏の眼に映った女三宮の姿である。女三宮の出家者として充足した日常の様子が見て取れる。それが、「何ばかり深くおぼしとれる御道心にもあらざりし」ものであつても、「あさへ給へる女の御心ざし」であつても、光源氏には「うらやましく」「くちをしう」思われるのである。光源氏の考える通りに、女三宮の出家が「何ばかり深くおぼしとれる御道心にもあらざりし」ものであるかについては、出家の意義をどう捉えるかによつて見方は分かれるだろうが、光源氏のような「一たび家を出で給なば、仮にもこの世をかへりみんとはおぼしおきてず」（御法二六三頁）という完璧を求める姿勢からすれば、柏木事件の重圧から逃避する目的で父朱雀院の助力を得、出家後も夫光源氏の手厚い庇護のもとに出家前と同じ邸に住んでいる姿は「あさへ給へる女の御心ざし」と思われても致し方ないだろう。「あさへ給へる女の御心ざし」については、同じく女三宮を念頭に置いたと思われる「ただうちあさへたる思ひのままに道心おこす人々」（御法二六三頁）という表現が既にあり、女三宮の出家に対する光源氏の評価は一貫して厳しいものがある。

一方、女三宮の立場からすれば、また別な見方がされるのも当然であろう。

虫の音を聞き給やうにて、なほ思ひ離れぬさまを聞こえ悩まし給へば、例の御心はあるまじきことにこそはあなれと、ひとへにむつかしきことと思ひきこえ給へり。人目にこそ変はることなくもてなし給ひしか、うちにはうきを知り給ふ気色しるく、こよなう変はりにし御心を、い

かで見えたとまつらじの御心にて多うは思ひなり給にし御世の背きなれば、いまはもて離れて心やすきに、なほかやうになど聞こえ給そ苦しうて、人離れたらむ御住まひにもがな、とおぼしなれど、およすけてえさも強ひ申給はず。

鈴虫五頁

これによれば、光源氏は何かにつけて女三宮への未練を語るの、出家して穏やかに暮らす女三宮にとってはわずらわしいだけで、人里はなれた住居に移りたい、とまで思っているとのことだ。この光源氏の姿は「かつての光源氏からは考えにくいような凡夫の態度」と見て「老い衰えた光源氏の心弱さ」<sup>10</sup>との酷評もされている。だが、この部分が女三宮の側からの視点で捉えられていることに注意しなければならないだろう。「人目にこそ」以下に述べられるように、女三宮の出家は、柏木事件を知って不快感を隠せず、また女三宮に説諭を試みる光源氏に向き合う術を失くして、「いかで見えたとまつらじの御心」で決行したことであった。従って、光源氏と一定の距離（夫婦関係の解消）が置ければ、「今もて離れて心やすき」境地でいられるわけである。しかしながら、鈴虫巻冒頭に描かれる持仏開眼供養にしても、日常の生活万般に亘つても、光源氏の手厚い庇護と配慮のもとにある。つまり、女三宮が嫌うのは光源氏が恋愛模様を仕掛けてくるかどうかではなく、光源氏が女三宮に近づくこと自体なのである。そのことで、また密通事件の責任を問われるのではないか、との怖れに耐えられないのである。だから、「人離れたらむ御住まひにもがな」という、自身でも理解していることであるはずなのだが、光源氏の庇護を離れて自分一人では実現不可能な願望、現実逃避の夢を抱くのが精一杯というところに止まる。実際、先の女三宮の心中の記述の後、光源氏が虫の音の良し悪しについて語りかけるのに続いて、和歌を贈答する場面がある。

（女三宮） 大方の秋をばうしと知りにしをふり捨てがたき鈴虫の声

と忍びやかにの給ふ。いとなまめいてあてにおほどか也。「いかにと

かや。いで、思ひのほかなる御言にこそ」とて、

（光源氏） 心もて草のやどりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

鈴虫五頁

女三宮の和歌は、光源氏が松虫よりも鈴虫の方がかわいいと述べたのに同調して、庭を造成してくれた「源氏の配慮に対する感謝の心を表すが、裏に源氏が自分を飽き厭っていることが分っているのでつらい、の意」<sup>11</sup>を込めたものである。その裏の意味を受けて、光源氏が「思ひのほかなる御言にこそ」と反発し、「心もて」と自分自身の意思で出家したものと反論しているわけである。この贈答自体は、「エチケツト」<sup>12</sup>と評されるように、常套の遣り取りの域を出るものではない。先の心中記述に引きつられて必要以上に女三宮の意識を重大視すべきものではないのである。同じく、光源氏の反発・反論も贈答歌の常套手段以上のものではない。この後、光源氏は琴の琴を弾き、女三宮は「数珠引きおこたり給て、御琴に心入れ給へり」という場面が描かれる。もちろん、これは若菜下巻の朱雀院五十賀に向けた稽古の場面を想起させるものであり、光源氏・女三宮両者が過去の幸福な時間の追憶に浸る一時の平安を物語る。従って、この贈答場面が決して両者間の葛藤を意味するものではないことは言うまでもない。また、光源氏の現況としては、「ここにきて漸く宮の密通の顛末を受容し、共感し始めたのである。密通をめぐるもつれた過去を抱えるだけに、ことばには男女の愛の恨みや皮肉がこめられるものの、根底には宮へのしみじみした慈しみがある」<sup>13</sup>という見方も存在する。光源氏が「密通の顛末を受容し、共感し始めた」か否かについては置くとしても、「宮へのしみじみした慈しみ」



という理解には賛意を表したい。ここで取りあげて来た場面以前であるが、女三宮持仏開眼供養が終了したところで、「いましも心ぐるしき御心添ひて、はかりなくかしづききこえ給ふ」(鈴虫三頁)という、光源氏の女三宮に対する態度についての記述がある。「心ぐるしき」とは、「気にかかつて心が痛むさま」「弱小のものに対するいじらしさ」<sup>15</sup>を意味する。光源氏は恋愛感情から女三宮に親近するわけではないのである。なお、「源氏は、年若い女三の宮を出家させた今になって、そこまで追いつめた自分の責任をも改めて強く感ずる」<sup>16</sup>という解説も深読みに過ぎよう。光源氏の女三宮に対する同情の念は見られても、「責任を強く感ずる」描写であるとは理解できない。先の光源氏の現況への理解を支持する所以である。

以上、先に述べた女三宮の偏向した視点からの心中描写で光源氏の現況を理解するのは危険極まりない仕儀と言わざるを得ないのである。

さて、冒頭の引用本文に続いて、光源氏は女三宮の飾る閨伽の花に目を留めて誉めた後、紫上と暮らした対屋の前栽の山吹の花の美しさに言及し、女三宮と次のような応酬がある。

〔前略〕植ゑし人なき春とも知らず顔にて、常よりもほひ重ねたるこそあはれに侍」との給ふ。御いらへに、「谷には春も」と、何心もなく聞こえ給を、言しもこそあれ、心うくも、とおぼさるゝにつけても、

幻一五頁

光源氏は、女三宮が返答に用いた古今歌の結句が「物思ひもなし」であったことに、女三宮の気配りのなさを感じて失望したのである。もちろん、「何心もなく聞こえ給」とある通り、女三宮に悪気は一切ない。ただ、自身の境遇に沿って卑下の気持を込めた積りで返答しただけである。それがいつもの女三宮だと言われれば返す言葉もないところである。従って、「あま

りにも敏感に反応するのは、自らの、出家を敢行することのできないもどかしさ、亡き紫の上への悲傷から逃れることのできない愛執に呻吟しているからであろう」<sup>16</sup>とまで言わなくとも、光源氏が女三宮に不快感を感じたのは対屋の山吹から紫上への追想に浸っていた心を逆撫でされたという気持になったからであるということは言えるだろう。

一体、光源氏は女三宮に何を求めたかったのか。事情は至極単純なことだろう。即ち、光源氏は自身の紫上追慕の心情に相槌を打って欲しかった、あるいはただうなづいて欲しかっただけなのだろう。ところが、期待に反して、女三宮が光源氏の心情に伝える何物をも持ち合わせていなかった、という事実が改めて明らかになったわけである。その結果、光源氏の紫上追慕の情はより深まるという進行になるのである。

## 五 明石君の場合

女三宮の応答に失望を味わった光源氏はその足で明石君のもとを訪ねる。突然の来訪に驚きながらも体裁良く応対する明石君の姿に、光源氏はまたしても生前の紫上を思い出すのだが、ここでは「のどやかにむかし物語りなどし給」(幻一五頁)のである。光源氏の心情は女三宮を訪れた時と変わりがなく、むしろ、出家の身であることで、女三宮の方が仏道のことや死者のことを語り合うのに適した環境にあるはずだった。それが、女三宮の配慮のない一言で台無しになってしまった。その点、配慮の人・明石君であれば間違いはないはずであり、実際に応対の最初からその特質を遺憾なく發揮してくれたのである。

人をあはれと心とゝめむはいとわろかべきことと、いにしへより思ひ

得て、すべていかなる方にも、この世に執とまるべき事なく、心づかひをせしに、  
幻一五頁

まず、光源氏は明石君に対してこう語り始める。女性への愛情に執着しない分別に始まって、どのような方面でも執着しないように気を配って来たのだが……。真先に女性への愛情に言及するのは、現在の問題として紫上への愛執に光源氏が苦しめられているからにほかならない。光源氏の発言は明石君の現況に関連するものではなく、自身の心情を一方的に述べているに過ぎない。「明石の君は、対話の相手であるよりも、源氏からその心奥の声を聞き出す機能的な存在になっている」と評される所以である。続いて、光源氏は過去の人生上の苦難の時期に出家するのに何の障害も無いと思えたこともあったのだが、晩年を迎えて係累に引かれて出家を果たせずにいる、と述べる。この言は鈴虫巻で秋好中宮に述べたものと変わらず、一貫した思いである。

さして一つ筋のかなしさにのみはの給はねど、おぼしたるさまのことわりに心ぐるしきを、いとほしう見たてまつりて、  
幻一五頁

光源氏の発言を受けた明石君の心情描写である。光源氏の心情を的確に把握した上で、その心情に全面的に寄り添い受容する内容となっている。以下、明石君の発言はこの心情を基調に展開する。明石君の応答は、光源氏が出家しないでいる現況を肯定し支持する一点に絞り込まれる。その中で注目される点がある。

(A) 大方の人目に何ばかりをしげなき人だに、心の中の絆おのづから多う侍なるを、ましていかでかは心やすくもおぼし捨てん。(B) さやうにあさへたる事は、かへりてかるくしきもどかしさなどもたち出でて、中々なることなどはべるを、  
幻一五頁

(A) 心やすかるべき程につけてだに、おのづから思ひかゝづらふほだしのみ侍るを。(B) などが、その人まねに競ふ御道心は、かへりてひがしくおしはかりきこえさする人もこそ侍れ。  
鈴虫六頁

光源氏を諫める明石君の発言が、鈴虫巻での秋好中宮を諫める光源氏の発言と、その言葉遣いと構文に於いて近似しているということである。右のA・Bをそれぞれ対照させれば一目瞭然である。勿論、これほどに近似しているのは偶然ではありえない。明らかに特定の意図があつてのことではなければならぬ。想定される作者の意図は二つ。ほぼ正反対の解釈になる。一つは、光源氏と明石君とがほぼ同一の発想から発言している、という事実を表現したものであること。今一つは、光源氏の秋好中宮に対する発言が明石君によつてなざられることで、光源氏の発言について何らかの批判的扱いがなされている可能性である。以下、光源氏と明石君との遣り取りを通じて、この点について考えて行きたい。

先の発言に続けて、明石君は次のように述べる。

おぼし立つほど鈍きやうに侍らんや、つひに澄みはてさせ給方深うはべらむと思ひやられ侍てこそ。  
幻一五頁

これは、明石君の独自の意見であり、出家の志を持ちながら果たせないでいる光源氏の現況を積極的に肯定する意見である。

いにしへのためしなどを聞き侍につけても、心におどろかれ、思ふよりのたがふふしありて、世を厭ふついでになるとか。それは猶悪き事とこそ。  
幻一五頁

これは、衝動的な出家が本来の志を全うできないことを述べて、一時の悲しみで出家することを止める意見である。光源氏においても、紫上の葬送を終えた日に次のような心中思惟が記されていた。

いまはこの世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちにおこなひにおもむきなんに障りあるまじきを、いとかくおさめん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくや、とややましきを、

御法<sup>一六〇</sup>七頁

収拾できない心の動揺を抱えたままでは出家の道を全うすることはできない、という考えであり、明石君の発言と同一の論理である。

明石君の発言は更に一点を付け加えて結論に達する。

なおしばしおぼしのどめさせ給て、宮たちなどもおとなびさせ給て、まことに動きなかるべき御ありさまに見たてまつりなさせ給はむま度は、乱れなく侍らんこそ心やすくもうれしくも侍べけれ 幻<sup>一六〇</sup>頁

明石中宮腹の宮達の成長とその地位の安泰を見届けて欲しい、と言うのである。「世俗に源氏がかかわっている限り明石中宮はじめ安泰でいられる」<sup>18</sup>と注されるように、明石君自身の利益保全を中心に置いた利己的発想ではある。同時に、その宮達が光源氏と明石君との孫に当たることを考えれば、光源氏の自然な子孫への愛情を喚起することでもあり、必ずしも明石君の強引な利益誘導的発想とばかりは非難できないことでもある。

いとおとなびて聞こえたるけしき、いとめやすし。 幻<sup>一六〇</sup>頁

以上の明石君の発言についての語り手の評であるが、同時に光源氏の眼に映った明石君の姿であると言つてよいであろう。ここでの両者の対面の場は、一貫して光源氏の眼から明石君の姿が捉えられている。なお、右の評が具体的に明石君のどのような様子を指したものであるかは解釈の相違がある。

A 「明石の御方の理知的な聡明な性格が、源氏の出家への歩みを説明する役割を与えられているのである。その役のはたしづりを作者は、「い

とめやすし」と賞めるのだ」<sup>19</sup>

B 「世俗の得失を考えて出家を延期せよとは、いかにも大人の物言いである」<sup>20</sup>

「明石君の諫言は自分の血統の保全のためであることをはっきりさせている」<sup>21</sup>

考慮すべきは、この評が明石君の様子を「めやすし」と褒めている点である。明石君自身のみへの利益誘導的発言をはたして「めやすし」と評価するものであろうか。確かに、一時の感情に流されずに、自身の一族に対する光源氏の位置を冷静に判断して、その存在の必要性を主張したことは「おとなび」た態度であると言えよう。その点において、明石君の言動は「めやすし」と言つてよいかもしれない。だが、前述したように、この評が語り手のみならず光源氏の明石君評でもあることが認められるならば、この対話で光源氏が明石君に期待したことが何だったかを考慮する必要がある。これも既に述べたように、光源氏は紫上を喪失した悲哀への慰藉を求めているのである。自身の現況への肯定的言動が欲しいのだ。女三宮の所ではそれが得られずに失望して、明石君のもとへやって来たのである。いかに明石君の一族の利益を考えた発言が「おとなび」たものであろうとも、特にそれを取り上げて「めやすし」と評価する心境にはないと考えられるのではないか。それよりは、光源氏の現況を肯定してくれた明石君の発言全体を評価したものとするのが自然な理解であろう。「彼の誇りを傷つけず、慎重かつ適切に具申する明石君の配慮、態度に「いとめやすし」と（光源氏ハハ引用者注）感嘆する」<sup>22</sup>という解釈に従いたい。なお、Aの理解は作者を物語の前面に出して来る点に於いて従いがたい点がある。やはり、光源氏の視点を重視すべきであると考ええる。

この後、光源氏は明石君の発言への応対を「さまで思ひのどめむ心ふかさこそ、浅きにおとりぬべけれ」と冗談交じりの口調で切り上げて、藤壺宮逝去時の悲嘆の追憶に続き、それに勝る紫上喪失の悲嘆の深さを語る。藤壺宮について明石君に語ること自体は、明石君の実娘が藤壺宮の男子冷泉院の中宮である事実からすれば必ずしも不適切というわけではない。しかしながら、明石君の応答が記されないように、まさに光源氏の一人語りの様相である。そして、夜更けまで長時間の滞在になったにも関わらず、光源氏は泊まらずに帰途に就く。この不泊の件については、直後に次の記述がある。

かくても明かしつべき夜を、とおぼしながら、帰り給を、女も物あはれに思ふべし。わが御心にも、あやしうなりにける心のほのかなとおぼし知らる。

幻五六七頁

「あやしうなりにける」とあるが、その理由は明らかである。言うまでもなく、紫上追慕の念に深く囚われている光源氏に他の妻と一夜を過ごす気持ちが生まれる余地はない。明石君もその心中を理解したうえで「物あはれ」という感情を抱いているのである。その事情は帰宅直後の「例のおこなひに、夜なかになりて」という記述によって念押しされている。仮眠の後、光源氏は明石君に文を贈る。

(光源氏) なくくも帰りにしかなかりの世はいづこもついの常世ならぬに

(明石君) 雁がゐし苗代水の絶えしよりうつりし花のかけをだに見ず

幻一七頁

二人の贈答歌のみを掲出した。光源氏歌を「永遠にと願った紫の上との共寝も終わったと嘆く。」と解釈する説もあるが、それではあまりにも贈答

歌の規範に外れたものとなってしまふ。普通に、仮の世はどこも常世ではないからあなたのところにも泊まらなかつたのです、と解釈して不都合はない。明石君の返歌は、贈歌の「仮」を「雁」に取り成して自身の境遇を詠んだものであり、必ずしも贈歌に寄り添ったものではない。しかし、訪ねて来た夫の不泊を恨まねばならぬ妻の立場からは定式の返しであると言えよう。この返歌で紫上の逝去に触れたことで、光源氏の脳裏に明石君との妻同士の関係として紫上の想い出が蘇り、懐かしく反芻することとなるのである。この明石君訪問の一節は、「むかしの御ありさまにはなごりなくなりたるべし。」という一文で閉じられる。言わずもがなの感もなくはないのだが、明石君登場場面の締め括りとして必要とされたものである。

明石君は、光源氏の出家志向の深まりとそれでもなお残る躊躇の念とを的確に理解したうえで、自身一族にとつての光源氏の存在の重さへの顧慮の願いを情理ともに具わった形で光源氏の前に示した。その理路整然とした応対には光源氏にしても反論の余地がなかった。一方で、その明石君の対応で光源氏は慰藉を得たのだろうか。光源氏の理想とする出家の在り方が肯定された点では満足するべきであろう。しかし、最愛の紫上を喪つた光源氏の寂寥感を慰める力は理知の人明石君にはなかった。むしろ、明石君にそれを求めること自体に無理があつたと言うべきであろう。しかしながら、それは「今の二人の間には、過往のような共感がない」と言われるべきものではないであろう。「過往のような共感がない」と言われる光源氏と明石君との夫婦関係は明石の地のわずかな月日を別にすれば、情愛よりも理知の勝つた関係であつたと総括できるのではないだろうか。もちろん、ほとんどの場面が明石姫君や紫上との関係においてであるが。

明石君はいかにも明石君らしい対応を見せた、ということである。

## 六 むすび

若菜下巻の朧月夜・朝顔宮出家の報から始まり、鈴虫巻での秋好中宮との対話、更には幻巻での女三宮・明石君との対話に至る出家の話題は、光源氏にどのような影響を与えたのであろうか。結論として言えば、影響と言いつけるほどのものはそこにはなかった。若菜下巻以降折に触れて語られた光源氏の出家志向は、最愛の妻紫上を喪つて以来頓に募つたが、周辺女性の動向如何に関わらず、前進もしなければまた後退したわけでもなかった。

それは、光源氏の道心観が「完璧な出家生活」<sup>(25)</sup>を求めるものであるというよりも、光源氏の置かれた立場と彼の責任感の問題に帰されるものであるようなのだ。「彼の物語は進展するにつれて、その道心と執心との無辺際の循環に徹底的に低迷していくのである。」<sup>(26)</sup>と言われる所以である。もちろん、「低迷」というのは光源氏の不甲斐なさを指す言では有り得ないであろう。「愛執に苦しめられ、現世に誠実に生きる者の人間的な哀しさを描いている」<sup>(27)</sup>ものである。

若菜下巻以降の周辺女性達との出家をめぐる話題は、光源氏の最晩年の在り方を浮き彫りにする。それは、結果的には紫上を喪い現世への関心を失いつつも、准太上天皇・源氏の統領としての周囲の負託に応える責務を未だに背負う存在としての在り方を全うしようとする困難そのものを提示することにほかならない。<sup>(28)</sup>その困難から逃避せず総体として引き受けて行くところに最晩年の光源氏の余人には為し得ない理想性があるのだった。

光源氏の道心と紫上の出家断念との関わりについては稿を改めて論じることとしたい。

注1 引用本文は『新日本古典大系 源氏物語一〜五』(岩波書店平五〜九)に拠り、巻名と頁数を示す。随時、傍線等を付した。

2 『新編日本古典文学全集 源氏物語四』(小学館昭四九)三六頁頭注二九。以下、『新全集』と略記。

3 『内閣文庫本 細流抄』(桜楓社昭五〇)二五頁。

4 『本居宣長全集 第四卷』(筑摩書房昭四四)四六頁。

5 注2の三三頁頭注一四。

6 同右。

7 『新潮日本古典集成 源氏物語五』(新潮社昭五五)二四頁頭注五。

8 注2の三六頁頭注二〇。

9 鈴木日出男「光源氏の愛憐執着——横笛巻から夕霧巻へ——」(『源氏物語の時空 王朝文学新考』笠間書院平九)七頁。

10 増田繁夫「鈴虫巻の世界」『講座 源氏物語の世界 第七集』(有斐閣昭五七) 凸頁。

11 注2の三三頁頭注三。

12 玉上琢彌『源氏物語評釈 第八卷』(角川書店昭四二)二五頁。

13 今井久代「鈴虫の巻の対話——光源氏の宿世と人々の愛執」(『源氏物語構造論——作中人物の動態をめぐる』風間書房平一二二)三四頁。

14 『角川古語大辞典 第二卷』(角川書店昭五九)四六頁。

15 注2の三六頁頭注七。

16 鈴木日出男「光源氏の物語の終末」『源氏物語虚構論』(東京大学出版会平

一五) 一〇二頁。

17 同右〇二頁。

18 『新日本古典大系 源氏物語四』(岩波書店 平八) 一六頁脚注五。

19 玉上琢彌『源氏物語評釈 第九卷』(角川書店 昭四二) 一四七頁。

20 注2の三五頁頭注一一。

21 注18の一六頁脚注六。

22 沢田正子「源氏物語の出離志向(三)——光源氏・祈りの旅」(静岡英和

学院大紀要 三二) 平一七・二) 三頁。

23 注2の五六頁頭注三。

24 注2の五七頁頭注♣印。

25 注22の三頁。

26 注16の九七頁。

27 注10の二二頁。

28 姥澤「〈負託〉に込え続けるということ——若菜下巻における光源氏の女三

宮説論——」(北海道文教大学論集 第一号) 平二二・三)。

# **The Solitude of Hikaru GENJI**

UBASAWA Takashi

**Abstracts:** There are some topics on becoming a priest from the volume of Wakana-ge to the volume of Maboroshi. The persons concerned are Oborotsukuyo, Asagao-no-miya, Akikonomu-chuuguu, Onna-san-no-miya, and Akashi-no-kimi. I exclude Murasaki-no-ue in this paper.

The desire to becoming a priest of Hikaru GENJI isn't influenced by the topics. Because, The topics are used for defining of the state of Hikaru GENJI in his most late life. He is between the desire to becoming a priest and the insistent in this world.